

ちよつといひ話

～ 杖 ～

私達は日常の勤行にて^{うやうや}懺悔文（恭^{しく} 御佛を礼拝し奉る^{みほとけ} 無始よりこの方^{むし} 貪瞋痴^{とんじんち}の煩惱につつまれし 身と口と^{ころ} 意^{とが} とに造るところの諸々の 罪と咎をみな^{ことごと} 悉^{さんげ} く懺悔し奉る）を読誦しております。身口意の三業に因って悪が垢となって身に纏わりついてしまうのです。身口意の三業とは十善戒（善入院で用いている経、感応品の中にある）の^{しんくい}不^{さんごう}をとった十戒の中、^よ身^{あか}は初めの三つ、^ま口^とはつぎの四つ、^ま意^{かつとう}は終わりの三つの事です。私達は毎日の生活が葛藤の繰り返しである爲、十戒を守るのは難しく、自然に罪を作る事になり、身に石鹸では落ちない垢が積もっていくのです。こうして身に着いた垢はなかなか取れません（第 32,19,25 号を参照してみてください）。病院の入院病棟にいても念佛の聲もしない、仏法の混迷か？この先心配です。垢が付いたまま死ねば救われがたき三悪道に堕ちて行く事になります（第 20 号参照）。

現在でも清浄無垢の修行として広く知られているのは空海大師の霊場、四国八十八ヶ所の巡錫です。今日では霊場をスタンプラリーのように回ってしまう人が多いのも事実ですが、そのなかで充分時間をかけて、娑婆の葛藤から離れ清浄無垢の修行として巡錫してみえる方もあります。

ここに珍しい実話を記す。善入院の団参同行としてほとんど毎回お四国を巡錫されました方に

岩佐 吾一という間々観音の篤信者がみえました。この方が最近逝去されました。旅立ちは四国遍路の姿（第 41 号参照）、杖に六文銭、団子を持って、葬送の儀式をすませ、出発なさいました。故 岩佐氏の報告が逐一間々観音の住職にありました。岩佐氏によると「道中の道は狭く、先導は杖がしてくれるそうですが、かなりのスピードであり付いて行くのがなかなか大変であるという事。最終報告として、今は極楽の二段目に来たから安心して下さいと。又、往生極楽への注意として、家族の和合が必要になる」と言う話をされたそうです。実話が示す如く、お四国の杖は無くしてはならぬ大切な役割をして下さるのです。